



熊本支部報

日本山岳会熊本支部

No. 1 平成2年3月31日
 発行 日本山岳会 熊本支部
 熊本市二本木3丁目3-8
 (田上敏行・気付)
 TEL.096-324-1200
 編集 本田誠也・川端浩文
 印刷 コロニー印刷
 熊本市二本木3丁目12-37

目次

・支部報発刊によせて……………1	・支部役員……………15
・会員随想……………1	・会員消息……………15
・会務報告……………11	・編集雑感……………16
・会員名簿……………13	

支部報発刊によせて

支部長 奥野正亥

懸案であった支部報が、いよいよ発刊の運びとなりました。もっと早く取り掛からねばならなかったのですが、機が熟さなかったのでしょう。しかし、これで支部の事業も一歩前進したと考えて、喜んでいる次第です。

支部報は云うまでもなく、会や会員相互の交流と情報交換が主な目的ですが、内容が豊富に盛り込まれるには、しばらく時間を要することでしょう。そのためには会員の皆さんの積極的な参加、協力が不可欠で編集担当者のご苦勞は云うまでもありません。これがわ

れわれの支部報だと云えるまで、皆で大切に丈夫に育て伸ばして行こうではありませんか。

われわれの平常の努力の集積と、総ての行動の記録が支部の「わだち」となって残されてゆきます。先日、新年晩餐会の席上で赤い還曆セーター(ずい分過ぎていますが……)をご披露した私ですが、幾年か後にこの支部報をどんな感慨をもって読むことでしょうか。今から楽しみにしているところです。

幻の熊本山岳会

西澤 健一 (4427)

私の登山事始めとでも言おうか、この頃は支部にも若い人達が増えて、今更古い話をしても考えたが、40年以上も前にそんな山岳会があったのか、また熊本岳界の一駒として

紹介できるならと思筆をとった。それは昭和21年(1946)5月にさかのぼる。戦時中、軍用航空機を製作していた三菱重工業熊本工場が、戦後は熊本機器製作所と改称し、平和産業として転身した。職員は私を含めそのまま居残ったが、その中では名古屋から来た人が多かった。当時所属していた設計課は、若い者ばかりの職場であり、「国敗れて山河有

い者ばかりの職場であり、「国敗れて山河有り」というが、いつの時に山に登ろうということになり、先ず阿蘇が候補地として選ばれた。

一行は私のほか、河内山、坂崎、坂本の4名。5月26日、晴天に恵まれて午前8時に国鉄水前寺駅を出発して阿蘇に向かった。コースは坊中駅から旧登山道の中岳火口に登り、山上神社を経て地獄温泉へ下るというものであった。それまで山に登ったことのない私は、広大な阿蘇火口原と新緑の美しさ、荒々しい溶岩群と噴煙などその雄大な魅力に感嘆した。すべてが焦土化した都会の様相に比べ、全く新鮮な驚きであった。大自然の造形美と驚異を胸中深く刻みつけられたのは私一人ではなかったと思う。割に早く地獄温泉についた私達は、ここで飯盒炊さんの後、垂玉温泉まで下り山口旅館に投宿した。因みにこの時の宿泊料は素泊まりで4円80銭、鉄道運賃が3円60銭という時代であった。翌日は長野から栃木、戸下を経て立野駅まで歩いた。この山行初体験後、他にも山好きの人達がいて、所内にグループ結成の気運が生まれてきた。その中には名古屋で中京山岳会に加入していた、加藤人志、小島義雄、山守光夫らがいて、しきりに職場登山グループの結成に向けて動いていた。6月下旬、賛同者を集めて一先ず「大自然会」なるものが結成され、私もそれに加わった。これが熊本山岳会の前身となるもので、ほどなく新しい山岳会の発足準備に取りかかった。「大自然会」は発展的解消ということで、既に30名前後はいた同好者に凶ると、同じ職場で結束は固く、直ちに了承された。当時は終戦後の傷心と虚脱状態で、今のように趣味を愛好するという余裕はなく、将来への見極めもつかない中で、それでも人々は大自然の声に導かれて山野を歩いた。明るい職場作りと対外的にも熊本を代表する山岳会というイメージで、今後発展させてい

きたいとの熱気がひしひしと感じられた。そうして昭和21年10月11日に、三菱青年学校を借りて熊本山岳会(KCC)は創立総会を開くに至った。発足に至る経緯は以上の通りであるが、会員の過半数が三菱の職員であるところから、昭和22年7月には、熊菱山岳部が併設されたが、飽迄熊本山岳会が活動の中心であった。

勿論最初から一般会員の加入を認めており、一般大衆向けの色彩が盛り込まれていた。

会の運営は会長を置かず代表制を取り、初代々表には加藤人志が推された。その下に若干の幹事を置いた。登山例会は毎月1回とし県内外各地の山で実施された。例会と共に会報の編集も行われ、これには筆が立つ小島義雄が当たった。大抵の会では会報の発行は後手にまわるが、10月の発足と同時に会報「樺火」が発刊された。3号まで出した時、北田正三氏(初代支部長)の既刊誌名と同一であることがわかり、昭和22年1月らか「あしあと」と改称された。以来毎月発行し昭和24年5月、解散時まで24号を数えた。今日見ると大変粗末なものであるが、当時占領下の日本では、会報一つ出すにも連合軍検閲局の許可を要し、また、用紙そのものが少ない時代であった。ガリ刷りの「樺火」は創作プリント社に、「あしあと」は童心文学会に印刷を依頼した。会員配付だけでなく、会員募集を兼ねて書店の店頭にも並べてもらった。会報ばかりではなく、昭和23年7月には会章と会歌も選定した。このようにして会の体制も整い、最盛期には会員数50名を数えるようになった。一方、熊本市内の他の山岳会との交流も始めたが、その頃には熊本アルコウ会をはじめ、カクノ組、九州電力、進相山岳会、勸銀、安田、住友などの銀行山岳部が活動していた。昭和22年6月、熊本県山岳連盟結成後は一層連絡交流が活発化した。今回は紙数の制限もあり、熊本山岳会の発足前後までを書いたが、

その後遂に熊本では育たなかった経緯については次回に譲りたい。

溝を登る

馬場 猛 (4943)

自然保護委員会全国集会の案内があった。委員とは名のみ、時たまゴミ拾いに行く位で何の役にも立っていない。「枯木も山の賑い」と、例によって「北の方」も誘い参加することにした。支部から本田さんも出席されるというので、事前に話し合っただけで行動を共にすることにした。10月5日、JR「みずほ」で出発する。名古屋で本田さんと合流したが、「長野からバスで戸隠の一の鳥居下車、飯縄山に登る。その後、黒姫駅まで行き駅前旅館に泊まる。明日は東登山道から黒姫山に登り、戸隠に下る」と言う。私の方は長野市在住の旧知の西澤繁幸さんと落ち合い、その案内で飯縄山に登り戸隠に一泊。翌日も西澤さんと西登山口から黒姫山に登り、山頂で東側から登頂する東京勢と落ち合う、という予定であった。ここで事情を知らない（知らせてない）本田さんを担いでやろうと「長野駅で西澤さんが待っている。戸隠は西澤さんが詳しいので案内してもらおう。」と囁く。本田さんは、熊本支部の西澤さんと決め込み、「西澤さんが来るとは聞いてらんなあ、それに戸隠が詳しいとは初耳」と怪訝な顔。当方性悪で種明しせず。

長野駅に着くと西澤さんが車で迎えに来ていた。何しろ30数年前、小谷温泉から雨飾山に登った時、偶然一緒になっただけの知り合い。その後は文通だけでお会いしていないので、些か心配していた。しかしお互い気が通っていたのか、一目でわかり手を握り合った。

事情がわかってほっとした本田さんと3人

で車に乗り込む。途中、西澤さんのお宅に立ち寄り奥さんから成しをお受けする。戸隠中社から林道に入り西登山口に登る。間もなく小雨、可成りの降雨があったらしく、山径はぬかった溝の中を歩いているようで滑り易い。遅く出発したので14時過ぎ、誰もいない静かな山頂に着いた。雨は止んだが深いガスで何も見えない。ほんの一瞬、妙高と火打が姿を見せてくれた。私達2人は、越水原の縦ノ木山荘まで、本田さんは更に黒姫駅前の宿まで、西澤さんに送っていただいた。山荘に着くと東京の奥野道治さん、福岡の吉村健児さんが待って居られた。家内が奥野さんのセンスの良さに感嘆し、「あなたも見習いなさい」という。流石は芸術家と恐れいるのみ。

吉村大先輩からは、「パパさん、ああなたは福岡のくせに何で熊本支部に入るとな」ときびしい言葉。大汗かいて入会の経緯から説明すると、30年も前からそうだったのかとお許しを受けた。10月7日、7時過ぎに早くも西澤さんが迎えに見えた。ご好意にはただ感謝。どこへ行ってもよいと言われたが、家内は初めての山であり、矢張り黒姫山に登ることとする。大橋で車止め、西登山道に登る。飯縄山と同様、泥濘の溝の道である。雨は間断なく降り続き視界はゼロ。頂上直下はズルズル滑るのに、手掛かりは全くなく手古摺る。

11時半、黒姫山2053mの山頂に着いた。ほんの数分後、東側からの東京勢も着く。冷たい雨の中、立ったままの昼餉。地元長野県からの参加者がいないため、西澤さんがガイドになる。帰路はルートを変えて北側の火口原へ下るが、物凄い急斜面。しかし木の枝をつかみながら滑り下りるので随分楽だ。童心にかえったようで愉快。七ッ池、大池と廻るが降り続く雨と深いガスのため、写真も撮れない。それからの山径では、大半の人が滑り泥まみれになって大橋の車止めに着いた。そこ

から山荘まで、西澤さんは2回も往復して皆を運んで下さった。翌日午前中は自然保護集会。内容は省くが矢張り出席してよかったと思う。会議終了後、西澤さんは奥さんを伴って、わざわざ見送りのため戸隠へ上って見えた。重ね重ねのご好意に甘えて、妙高山麓の燕温泉まで送っていただいた。翌9日は家内と二人で妙高山に登る。山麓の雨は山上では雪となり可成り積もっている。雪の重みで押し曲げられた木の枝が道を塞ぐ。乗越しもならず、潜りもならずさりとて巻き道もなく難行苦行の登り。この山道も深く抉れた溝である。

飯縄や黒姫より水量が多いだけ始末が悪い。汚れてもよいように雨具をつけたが、雪の上で休むのにも好都合だった。13時半、どうか妙高山2446mの山頂に立つことができた。

ガスが去来して火打山が時折り姿を見せるが、戸隠、黒姫は全く見えない。再び嫌な溝の道を下る。今度の山行は、最後まで溝の登降だったなあ、と語り合いながら山を下った。

私の登山近況

和仁古 昇 (7778)

この頃は深田久弥さんの「日本百名山」にあやかって、全国的にさまざまな百名山が選ばれ、登られているようである。昨年7月私はアルパイン・ツアーの企画で、北海道の知床半島の山に登った。その時、同行した殆どの人が、深田百名山を目指して登っていることを知り驚いた。その内の数人の女性が、来年はトムラウシに登りたいが、私達でも行けるだろうか、同行の地元ガイドに尋ねていた。若いガイドは何と答えてよいものやらと当惑気な面持であった。九州に住む私にとって深田百名山の殆どが遠隔の地にあり、先ず

は近辺の山に登ることが多い。以前、地元の熊日新聞社が選んだ「熊本百山」があるが、山に疎い記者の手によるもので余り権威がない。JAC熊本支部30年記念誌に、本田会員が寄稿した熊本百山があり、この山々を登ることにした。そして昨年7月6日に、五家荘の茶臼山に登り、百山登頂にピリオドを打つことができた。最近マイ・カー登山が流行し手軽に行けるようだが、ペーパードライバーとなった私は、昔ながらの鉄道やバスで山に登ることが多い。その点で便利なのは何といっても福岡県の山である。しかし福岡には地勢的に余り高い山がないし数も少ない。

いま西日本新聞社刊の「福岡日帰りの山」を手引書にして、せっせと登っている。それには75山が記載されているが、400米未満を割愛した61山を登山の目標とした。既に41山に登ったので完登も間近い。先日、来熊された久留米の脇坂順一先生の座右銘、「仁者楽山」に少しでも近づくべく、マイペースでゆっくり山を楽しみたい、と思っているこの頃である。

ある落日

門脇 愛子 (8605)

初日の出を見に金峰山に登らなくなってから、もう幾年になるでしょうか。はじめて初日の出を見に金峰山に登ったのは昭和25年頃でしたか、すばらしい日の出だったと記憶にあります。その後は山仲間と正月の3ヶ月はどこかの山で過ごすことが恒例となり、金峰山の初日の出登山は途切れました。そのかわり大晦日に、その年の落日を見に登ることにしました。大晦日の山頂は、元日の朝にくらべると静かです。しかし、なかなかきれいな落日を見ることは少ないのです。たいて有明

海を隔てた雲仙の山々に雲がかかり、その中に日没となることが多いのです。それでも、雲間から放射される光の矢が海面に反射してキラキラと輝くさまは、美しい眺めです。1989年の落日も、この年の山行を無事に金峰山で登り納め、またこの日に必ず会える山友達とも会うことができ、幸せでした。因みに私は、井上靖氏の「ある落日」という小説が好きです。関係のないことですが……。

この頃思うこと

川端 浩文 (9328)

一口に山登りといっても、身近かな低山へのハイキングから、ヒマラヤの高峰へのタクティックスまで色々あるようだ。これまでの私の登山をふりかえって見ると、恥ずかしながら未だハイキングの域を出ていない。岩登りや冬山登山、山スキー、沢登りも単独行もしたことがない。それかといって、山の動植物や地質、気象、写真や絵画、文学等にもさして造詣がない。長年、教師をしているが登山のことで生徒たちに教えることも少ない。

職場の同僚たちから「もう大抵の山は登ったでしょう」と云われる。山登りに誘うと、「とてもついては行けません」と云う。どうも過大評価されているらしい。自分のことは自分が一番よく知っている。JACの先輩方の話をきく毎に、まるで別世界のことのように思えて、私の山登りは一体何なのだろうと、考えさせられるこの頃である。



山の歌 —— 山恋うも ——

河上 洋子 (9402)

山恋うも遂には人を恋うものと冬いくたび
の久住の雪踏む (久住山)

五十年の生きの証しと山靴の型に凍てたる
尾根登りゆく (阿蘇山)

愛という象なきもの埋めおきし錯誤の谷か
雪の霧氷沢 (雲仙岳)

永かりし恋の終りを云う男幾重なりの夏山
を来て (白馬岳)

果てもなき縦走の山に咲きていし花にわが
夏まだ燃ゆるあり (槍ヶ岳西鎌尾根)

ワタスゲの花野無言に越え来たる少年の夏
に何生れいむか (薬師岳)

雷鳥沢ときげばやさしき野營地に夜をこめ
て鳴る遠き雷 (雷鳥沢)

槍の肩はなお遠くして地に低く祈る形に膝
まげ歩む (槍ヶ岳)

山一つ越え来しゆえの昂りか雪溪のきしむ
音にも目覚めつ (剣岳)

何処にも逃げ場はなしと思ひゆく危き崖に
咲く山つつじ (阿蘇南外輪山)

昔、NHKに勤めていた頃「山恋い」という歌集を出した同僚がいた。勿論その人も知らず、その歌も知らない。ただ正統派の山男

であるときいた。私もその頃何となく山に惹かれていて、「山の思想史」の加藤文太郎などをテキストの様に読んでいた。冬山単独行など思いもしなかったが、凍った蒲鉾をしんと淋しく食べる、なんて遙かなこととして憧れたものである。そのうち、私も歩ける山から歩こうと志を立て、行動派の今なら「オバタリアン」二人で、気儘な山行を始めたのが、四十代半ばのこと。野草をたずね、樹の花を賞で、冬山、霧氷と少しづつ足をのばし、その折々に歌をつくった。しかし私の「山恋い」は所詮人から離れられなかった。山が素晴らしければ素晴らしい程、私はしんから人を愛しいあなと思うのである。

スリランカのサファリ

鶴田佐知子 (9649)

山もふくめて東南アジアは私の好きな所である。12月末、小規模ではあるがスリランカでサファリを体験することができた。28日にコロンボから西海岸を南下し、8時間ほどでティサマラマに着いた。27日早朝ジープに乗り野鳥保護区へ行く。広い水辺の砂地に集うペリカンの群。フラミンゴや黒い鵜の群。大きなワニは人の気配で水にもぐり、顔が黒くシッポの長い猿の群は、木から木へととびまわり、クジャクや大きなトカゲなどもある。午後3時、ヤラ動物保護区へ移動し夕刻のサファリ。期待したヒョウは見る事ができなかったが、象のファミリー、野生水牛の群、白い模様の鹿の群、日本猿に似たサル、黄色い嘴のカササギサイ鳥の群などを見る。

帰路、ジープにゆられながら上空に、金星、オリオン、南十字星が輝いているのを見て思わず旅の感傷に浸る。私の近況の一つです。

山への期待と、夢と

神谷 平吉 (10185)

待望の日本山岳会に家内ともども入会を許して頂いたのが、昭和62年11月。いつしか2年有余の歳月がたってしまった。この間、熊本支部の多くの会員の方々とお知り合いになれて、何回かの山行や諸行事を共にさせて頂くことが出来、幸せ一杯である。

山を愛するという一点でつながるこの会ほど、何一つ気兼ねなく、心を開いてお付き合いできる楽しい会を、果たして外に見出すことが出来るであろうか？少なくとも、私達にとって掛替えのない、大切な存在なのである。

その例会が、多くの場合、前日に目的地近くの宿に集合する。その夜の集いでは酒を酌み交わし、過去の山行の四方山話から時には、スライドまで見せて頂けるなど、有難い限りである。お陰様で、どなたに対しても年来の知己であるかのような想いがしている。ところで私達のこの1年を顧みると、多くの会員の方が、極めて前向きに高次の山行にトライしてられるのに反して、開業医という職業上の制約があるとは言え、殆どが九州の中だけの低山徘徊、それも大半が休日の日帰り山行で、ほんの数回連休に2～3日間の山行というささやかなことしか出来ない。唯回数だけは、昨年目標とした50回登山を達成出来たものの、内心こころ忸怩たるものがある。こんなささやかな山行ではあるが、その一つ一つを大切に、山々が持つ豊饒な大自然の限りない営みに耳を傾け、感動を味わいつつ、下界の生活で酒れかけた心を潤し続けて、今日に至ることが出来た。しかしながら、このところ、山への期待と夢とは、体力の劣えと反比例して、年と共に膨らむ一方で、未だ訪れた

ことのない国内の山々、また世界の山々を、書籍の中に追い求めながら、いつの日か仕事から解放されて、それらの山々を訪れる日の来らんことを、ひたすら待ち望む最近である。

良きかな！日本山岳会熊本支部

神谷 文子 (10186)

山好きの私達夫婦は前々から、日本山岳会に入会させて頂くのが夢でした。とても無理だろうと、諦めていたのに、浩宮様がご入会されたと伺い、身の程も弁えず熊本支部常務委員の田上さんに、入会のお願いを致しました。昭和62年の秋頃であったと思います。

田上さんと、西沢支部長（当時）のご推薦を頂いて、待望の日本山岳会に入会することが出来ました。本当に有難く、嬉しく思っている次第です。ベテランの方々ばかりの中に私達のようなものが、と一寸心配しましたが、昭和63年1月9日、熊本市のホルン山小屋で行われた新年晚餐会に出席して、その不安も一掃されました。当日、主人の方は医師会の会合と、熊本高校PTAのOB会などが重なりましたが、何よりも、この会に参加させて頂きました。ご婦人の会員も多数おいでになり、皆、優しく声をかけて頂き、すぐにお友達になることができました。それから今日まで、余程の用事がない限り、支部の行事に出席させて頂いています。私達のように本当に「下手の横好き」で、海外の山は勿論日本アルプスでの冬山経験もありませんのに、会員の方々からは、分隔てなく、何時も暖かく迎えて頂いて心から感謝しています。主人も、山が生き甲斐だと日頃言っておりますが、私も全く同感です。仕事柄、日数がかかる遠い山にはなかなか行けませんが、近くの山にコツコツと登りながら、二人で「その

うち、もう少しマシな山登りをしたいものネ」と話し合っています。今後共宜しくご指導下さいますよう、心からお願い申し上げます。

冬の八ヶ岳に登る

加藤 稜子 (10232)

ボツボツ山歩きを始めて7年半、子供達からも解放されて、年数回遠出の山行が可能となった。図らずも今回初めて冬の八ヶ岳登山ができ、その余韻に浸っているところである。

初心者向け冬山の企画で、メンバーがスタッフを除けば皆私より可成り年配の方ばかりで、体力的に自信はあったものの、気持ちの上ではプレッシャーがかかり大変であった。しかし案ずるより産むが易いとか、天候に恵まれたこともあって初心者の私達が皆無事に赤岳、硫黄岳を踏破することができた。これも偏に計画の全般から事前のトレーニング（向坂山合宿）数次にわたる詳細なミーティングなど、リーダーの広吉さん（支部会員）の指導の賜物であったと思っている。その分計り知れない程のご負担をおかけした事と思う。夏山と違って人も少なく、銀世界の中、雪を踏むキュッキュッという音、オーバーボンの擦れ合う音、ピッケルを抜く時のギョッと軋む音など、静寂そのものの中を黙々と歩く冬山は、何ともいえず心が満たされる思いであった。時折り出会う山男や山女に人恋しさを感じたり、雪の上につけられた小動物の足跡にも、ああこんな厳寒の中にと、いとおしさを感じたのも私だけではなかったと思う。マイナス15度も寒いと感じない程心の昂揚があった。大きなカラマツにふっくらと積もった雪、カモンカとの出会い、夕日に染まった真紅の赤岳、山頂近くの岩や道標につ

いていた見事なエビのシッポなど、いまでも鮮明に心に焼きつき、これからの山行の糧となるだろう。

また、赤岳山頂の岩上に立った時、目の前に大きな富士山の秀麗な姿が、それこそ山頂から広い裾野まで、一気に見渡せた感動を忘れることはできない。

天草の観海アルプス

長田 光義 (10240)

天草上島東海岸に連なる山々は「観海アルプス」といわれていますが、その由来を調べて見ました。この名称はいつ頃から使われるようになったのでしょうか。昭和7年発行の「山岳27-2」に、竹内亮氏の「天草島の山々」と題する一文がありますが、この名称は使われていません。支部の本田会員にお尋ねしたところ、昭和10年発行の「天草写真大観」の地図に書かれており、昭和8年、画家の龍駿介氏が国立公園委員の田村剛博士を案内した際、何れかが言い出したものではないかとのことでした。昭和9年雲仙国立公園が誕生し、昭和31年に天草地域が拡大指定されました。

また昭和53年にこの地域に九州自然歩道が開通しました。因みに千歳山、高舞登山、龍ヶ岳は昭和7～8年に命名されたと伝えられています。詳細については拙著「観海アルプス」をご覧ください。



クロユリ

——観海アルプス——

天草島の「観海アルプス」と周辺の山20座を紹介するもので、山名の由来や歴史についても触れられています。

1部700円(送料210円)で頒布されます。希望者は下記に申込んで下さい。

〒863 本渡市川原新町55 長田光義気付
天草アルパインクラブ
振替 熊本4-43411

「ナイル」事件に於る私見

広吉 功 (10278)

小川山のお殿様岩だったと思うが、人気のある高難度ルート「イムジン河」のすぐ横に美しいカンテがあり、クライマー達の注目的となっていた。そのラインが開拓され「ナイル」というルート名で発表されたが、その核心部に電動ドリルでホールドが刻まれたことが、問題の発端であった。「岩と雪」No.136にプロガイドの鈴木昇己氏が、予め電動ドリルで開けた穴をホールドにして開拓した「ナイル」5.12を発表した。忽ちにして反響を呼び、「この種のルートは存在すべきではない」と主張する菊池敏之氏によって、ボルト、ハンガーが撤去された。このことは「岩と雪」No.137及びクライミングジャーナル誌に明るので参照されたい。岩を削ったとか、ルートとして認められないという狭義な論争が主体であり、また自然破壊を云々する意見もある。電動ドリルの使用が自然破壊なら、浮石を落としたり、木を切ったり、プロテクションを埋めたりすることも同様であろう。これ

を肯定するところから、岩登りも、山登りそのものも始められているのではないだろうか。

前置きがながくなったが、これはアルピニストとニューグループの対決の序章である。

前記のような即現的な現象を云々する狭義なものではなく、この事に孕まれているものは永年に亘って培われたきたアルピニズムの幽かな声である。「険しいところを登るのが悪いと私は言っているのではない。より困難なルートに登れるものなら、どんな困難なルートでも登ってくれ。だがそのルートの終わりには必ず頂きがあり、ルートとして独自に評価されるものでなく、その頂きのより魅力的な道程であることを忘れないでくれ」松濤 明(風雪のビバーク)より……ピッケルで打たれ、登山靴で蹴られて教えられてきた「山」は、この松濤氏の名文に象徴される。昨近、山岳会等に入らず、仲良し組で山登りに出掛け行詰まると簡単な講習会へ顔を出して、そこそこに山を楽しむという登山者風景がある。

その風景は岩場にも同様に見えている。北アの岩場へ、欧州の山へ、ヒマラヤの壁へと夢を抱いて通った「比叡の岩場」。そこにもピークにつながらない2～3mの、また10mに満たないルートが誕生している。「山」を識らないニューグループが岩場のすぐ横まで車を乗り付け、歩いて行くことの出来る岩壁の天辺からロープを垂らして、何と最初に電動ドリルでボルトを埋め込んでから登るということだ。そのルートのみをうまく登攀することが目的で、勿論ルートとして独自に評価されるもので、頂きへの魅力がある道程ではない。一般社会では余り通用しないが、山では素晴らしい感性と技術を備えた「山男」たちは、その社会の中で落着きを失う。自分が本来いるべきところではないと焦り、また山に向かうアルピニストのひとりが鈴木氏である。

氏がどうしても「ナイル」に登らねばならなかった真意は到底理解できるものではないが、私には氏のアルピニストとしての意地がひしひしと伝わってくるのである。8000mのクライムも、小川山のクライミングも同次元でとらえたニューグループのレジスタンスではなかったか。ミーハーとまでは言わないが、登山という行為から比べれば、オンリーショートルーターとしてのこのニューグループは安直である。今を時めくフリークライマーに対する警鐘といえはるか大袈裟だが、逆に言えばこの事件は、「岩場を乗取られた山男たち」の姿を浮彫りにしているといえよう。こんなことを書くと、「あんたら5.12は登れんだろ！今さら古いアルピニズムは流行らんよ」という声も聞こえてきそうだが、それはそれで覚悟の上で「山」がメモリアルにならないように、攀り続けてゆくつもりである。

平成元年の山

藤本多加志 (10422)

定年退職を機会に、先輩諸兄の紹介で日本山岳会に入会しました。昨年還暦をむかえ、ふり出しに戻った気持ちで幾つかの山に登りました。古くから登り慣れている九州の山々ですが、遠くは大隅半島の御岳や甫与志岳、また北薩の冠岳など。近くは九重山群の山、八方ヶ岳、洞ヶ岳、京丈山などに登りました。

なかでも京丈山は夏に単独で、最初は五家荘側から谷沿いにアタック、次に砥用町柏川から主稜線まで登りつめたものの、いずれも深いヤブに阻まれて登頂できませんでした。秋、三度目の正直は支部会員の本田さん、池崎さんと3人で、柏川から最短コースをとり、やっと三角点を踏むことができました。その

後、私にとって初めての海外登山は、この3人のメンバーによる台湾・玉山でした。新年もそれなりに初めての山や、ヤブ山を訪ねて歩きたいと思っています。

台湾・玉山への誘い

池崎 浩一 (10432)

私は昨年11月、古い山仲間の本田、藤本両氏に誘われて玉山に登った。幸い連日の好天に恵まれ、黎明の山頂からは、360度の大展望を満喫できたし、前日は南峰近くまで登り、玉山主峰の雄姿を心ゆくまで眺めることができた。さすがに台湾第一の高山に相応しく四辺を睥睨する雄大な姿は、聞きしに勝るものであった。玉山に登るには、外国人としての入山許可が必要であるが、手続きは旅行社がやってくれる。そのうえ滞在期間を通じて、中華民国山岳協会派遣ガイドが同行するので、万事に不安なく登山に専念できる。

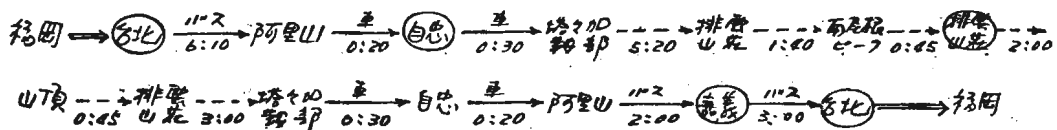
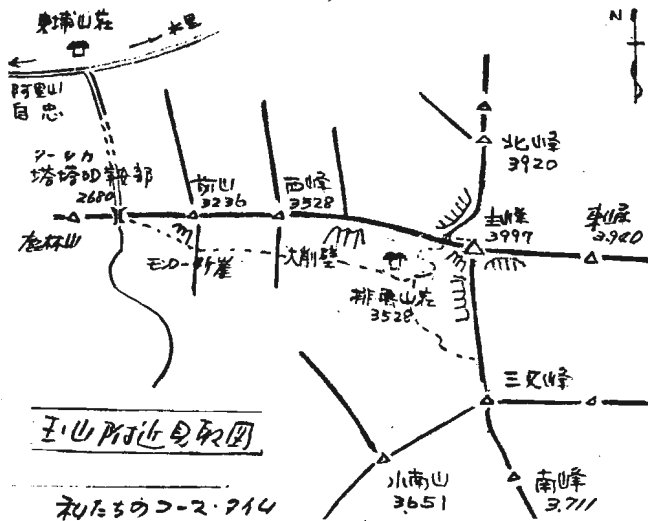
玉山へのアプローチは、嘉義から阿里山に

はいり、塔塔加（タータカ）鞍部を経て、排雲山荘に至る西尾根コースが最も利用されている。鞍部から山荘までは、玉山西尾根の南側山腹を縫う8.5軒の緩やかな登りで、500米毎に標柱があり、栈道が架けられている。

一帯はビャクシン、ツガ、アカマツ、笹竹などの原生林で、明るく歩きやすい山道である。

排雲山荘を出て間もなく、かん木帯となり、森林限界（3700米）を過ぎると、岩まじりのジグザグの登りとなる。風口と呼ばれる八通関分岐の肩に上ると風が強い。ここから防護ネットが張られた急峻なガレ場を登り切ると、1等三角点のある玉山山頂である。山荘から2.3軒、標高差369米の登りである。

排雲山荘は「玉山国立公園」の管理で、80人収容の石造りの頑丈な有人小屋である。寝具も常備されていて、自炊しなければならぬが、飲料水は充分貯えられている。玉山は山が高いわりにはアプローチに無理がなく、現地の受入れ体制も整っているうえ、旅行社に依頼すれば煩雑な手間も省けるので、先ずは支部の皆さんにもお勧めしたい山である。



新入会員の自己紹介

出来田耕介 (10522)

私は、平成元年7月に入会した熊本支部でも最も新しい会員です。奥野支部長と神谷会員からのご推挙をいただきました。昭和23年、中学3年の夏休みに霧島縦走をしたのが、初めての山登りでした。母の帯芯で作った買出し用のザックに地下足袋、という出立ちでした。その後も1年に2～3回位、阿蘇、九重、市房山などに出かけていました。昭和52年、久しぶりで阿蘇高岳に登りました。僅か10kgのザックの重さがこたえ、また山頂付近では足が引付き、ガスの中で一時道に迷ったりで散々な目にあいました。これに愕然として、少しは体力を養おうとジョギングをしたり、若い人達について山を歩くようにしました。

丁度この頃から熊本市医師会に登山の同好会ができて、この方にも参加して山行回数を増やしてゆきました。特に昨年は公務から逃れたこともあり、大いに山登りを楽しみました。遠くは北アルプスの槍ヶ岳から、近くは鞍岳まで年間53回という自己記録をつくりました。この中では5月の傾山、祖母山の単独縦走と、新雪の立山で大量遭難があったあの日の槍ヶ岳登頂が強く印象に残っています。

傾山への登りはじめは、我ながら驚く程快調で、若い人のグループを追い抜いたりしましたが、その崇りかツキノワグマで有名になった本谷山の登りでは大分くたびれ、キャンプサイトの尾平越ではバテてしまいました。

槍ヶ岳では、早朝殺生小屋出発する時は快晴でしたが、槍ヶ岳山頂往復後、肩の小屋を出て南岳へ向かう途中烈しい吹雪になり、中岳から引返すというハプニングがありました。気象激変による山の恐ろしさを痛感させられたものです。これらを貴重な教訓として今後

安全登山に徹したいと、心に念じている所です。

諸先輩の皆さんのご指導、ご教示をよろしくお願い申し上げます。

会務報告

◇ 熊本支部通常総会

日時 5月14日 午後2時

場所 熊本市大江町 NTT熊本会館

内容 支部報(年1回)の発行、山の写真展と冬季例会の計画、田上常務委員の再任、宮崎豊喜氏古稀の祝宴。

出席者 奥野、西沢、馬場、宮崎、石井、本田、田上、和仁古、大木野夫妻、松本、菊池、河上、鶴田、樋口夫妻、広永、加藤、吉田、矢毛石、長田、池崎、前田 (23名)

◇ 日本山岳会・平成元年度総会

日時 5月26日 午後6時30分

場所 東京都・番町グリーンパレス

出席者 奥野支部長、本田副支部長

◇ 支部委員会

日時 6月11日 午後6時30分

場所 熊本市内坪井、ホルン山小屋

議題 支部報の発行、「山岳」の原稿、山の写真展、自然保護委員

出席者 奥野、本田、和仁古、田上、川端、菊池 (6名)

◇ 夏季例会(山の映画とビールの夕べ)

日時 7月29日 午後6時30分

場所 熊本市内坪井、ホルン山小屋

内容 神谷会員の8ミリ作品「早春の仰鳥帽子山」、「黒岳の春」、「上高地散

策」及び中沢義直氏のビデオ「我が山・常念山脈」を上映した。また併せて会員持寄りの「山の写真展」も実施した。

出席者 奥野、西沢、宮崎、本田、田上、和仁古、大木野、松本、門脇、河上、藤本、広永、神谷夫婦、加藤、吉田、矢毛石、藤本、池崎、宮崎、出来田、会員外2名 (23名)

◇ 沢井自然保護委員長の阿蘇視察

日時 8月15日
場所 阿蘇山一帯
内容 熊本地域を担当される沢井委員長を迎え、阿蘇周辺のリゾート乱開発の現場を視察した。

出席者 沢井、奥野、西沢、本田、田上 (5名)

◇ 自然保護全国集会(長野県戸隠高原)

日時 10月8日 9時~12時
場所 長野県戸隠高原 もみの木山荘
議題 各支部の自然保護状況、山岳会としての環境保全運動はどうあるべきかについて討論

前日(10月7日)黒姫山登山

出席者 本田、馬場夫妻 (42名)

◇ 秋季例会(白髪岳)

日時 10月22日
場所 白髪岳(1416m)
参加者 奥野、西沢、馬場夫妻、石井、本田田上、川端、河上、藤本、樋口夫妻、神谷夫婦、池崎、園田、馬場出来田、会員外1名 (19名)
前夜は人吉市の国民宿舎「くまがわ荘」に宿泊。馬場博行会員のネパール、ヒムルンヒマールのスライドと説明会をひらく。

◇ 全国支部懇談会「89伯耆大山の集い」

日時 10月28日~29日
場所 鳥取県米子市 皆生グランドホテル 伯耆大山(1711m)

内容 10月28日、支部事務局担当者会議、午後6時から山陰支部設立40周年記念祝宴及び懇親会 (157名)
10月29日 大山寺から大山登山

参加者 奥野、本田、石井、門脇、鶴田加藤 (6名)

◇ 日本山岳会・年次晩餐会

日時 12月2日 午後6時
場所 東京都千代田区九段下 私学会館
出席者 奥野支部長、広永 (2名)

◇ 新年晩餐会

日時 平成2年1月13日 午後6時30分
場所 熊本市内坪井、ホルン山小屋
内容 1年をふりかえって出席者全員のスピーチ、及び田上会員の結婚を祝ってゲストとして寿美子夫人を招待した

出席者 奥野、馬場夫妻、宮崎、石井、本田、田上夫妻、和仁古、工藤、門脇川端、河上、鶴田、樋口夫妻、広永加藤、吉田、阿南、池崎、出来田内田、大木野夫人 (25名)

◇ 冬季例会(九重山)

日時 2月12日
場所 九重山・中岳(1791m)
内容 冬山訓練を兼ねて実施したが暖冬のため積雪なく、久住高原沢水から稲星山を経由して中岳登頂

参加者 石井、本田、池崎、藤本、川端田上夫妻、和仁古、大木野夫妻、会員外1名 (10名)

支部役員

- ・支部長 奥野正亥
- ・副支部長 本田誠也
- ・常務委員 田上敏行 和仁古昇
- ・委員 松本莞爾 菊池更生
川端浩文
- ・監事 馬場 猛
- ・顧問 西沢健一
- ・自然保護委員 田上敏行 河上洋子

会員消息

・熊本厚生病院に入院中の玉名金助さんから新年の賀状をいただいた。「92才で新春を迎えました。車椅子にたよっておりますが、もう一度自力で歩けるようになりたいので、リハビリ体操の訓練にはげんでおります」

熊本の登山用品専門店の草分け（タマナ運動用品店）は、県岳連の事務所でもあって、ながい間県内岳人のたまり場になっていた。

玉名さんは熊本アルコウ会の古い会員で県岳連の理事、県協評議員もされていた。

80才の時には、支部設立20周年記念登山で本部の望月、折井両副会長と共に祖母山に登頂された。入院生活は今年で12年になるが、気力旺盛であり再起を期待している。

・玉名さんと同じ頃発病して、熊本厚生病院に入院された内田英夫さんは、昨年暮れに自宅近くの朝日野病院に移り療養中である。

引続き看病されている晴子夫人（会友）のご苦勞について、ずい分ながいことでもあり心からお見舞いを申し上げます。

・世界6大州の山に登った工藤文昭さん（県立小国高校・教諭）は、今春の異動で熊本市

の江津高校に転任された。ネパールヒマラヤ、アルプス（モンブラン、マッターホルン）アフリカ（ケニア、キリマンジャロ）グリーンランドの山、ニュージーランドのクック、カナダのアシニボイン、南米のアコンカグアなど工藤さんの足跡は全世界にわたってすこぶる広い。

・チョモランマ三国友好登山に北側隊員として参加した馬場博行さんは、今冬単独で槍ヶ岳北鎌尾根をトレースした。NTT熊本に勤務する馬場さんは、これまでネパールヒマラヤのクスムカングル6369m南壁登頂、カングル7020m冬季単独登頂、マカルー冬季北西稜その他ヒムルン・ヒマールやジュガールのドルジェ・ラクパなどにも足跡を残しているヒマラヤニストである。

・1963年春、ヒムルン・ヒマール7126mに電電九州山岳会隊員として挑戦した中馬薫人さんは、今期の異動でNTT宮崎支社から、福岡のNTT宗像営業所長に転任された。

・熊本市でヒロオアートスポーツを営んでいる広吉功さんは、今冬も初心者の方の冬山宿舎を八ヶ岳南部の赤岳、硫黄岳で実施した。

これには会員の加藤稜子さんも参加して、初めての冬山の美しさと厳しさを体験された。

広吉さんはネパール・ヒマラヤ、カラコルムのパツラなど海外登山経験も豊富な現役のクライマーである。

・アウトドア専門店「シェルパ阿南」を営む阿南誠志さんは「熊本自然を愛する会」や、「やまびこ山村塾」を主催し、共育・共生をモットーに独自の青少年教育を実践し展開している。今冬はアフリカ登山ツアーを組織して、キリマンジャロ、ケニア山に登頂した。昨年は台湾の玉山、雪山に登ったが、毎年ネ

パール、ヨーロッパ、韓国の山などに掛けている。また「九州百命山」を選定してほとんど毎週計画的に登っている。

・熊本市議会議員4年目の河上洋子さんは、毎日休みなしの多忙。山に行けないのが何よりつらい、とこぼしているが、例会には万難を排して出席されている。自然保護委員として、熊本の緑を守る行動力に期待している。

・和仁古昇さんの昨年の山行回数は95。そのうち25回は金峰山ですからと云っておられたが、100回にはとどきませんでしたと残念そう。あまり元気なので、古稀はとっくに過ぎたのに誰も気付かなかった程である。熊本でもっとも古く（昭和8年設立）、もっとも大きな（会員数450名）熊本アルコウ会の会長で、本業の和仁古薬局（漢方）はほとんど息子さんに任せきり。支部は設立当初からアルコウ会の会員の加入が多い。長老格の玉名金助さん、宮崎豊喜さんをはじめ西沢健一さん、菊池更生さん、門脇愛子さん、鶴田佐知子さん、加藤綾子さん、吉田恒子さん、宮崎守さんなど総数の四分の一を占めている。毎月の例会登山も欠かさず参加している人が多いという。和仁古さんは登山回数だけでなく、いつも身近な目標を立てて登っている。熊本百山や福岡の山などがそれであろう。

（本田 記）

編集雑感

小さいながら支部という屋台を構えて、すでに30年をこえた。会員数もやっと40名となり、かつては閉散としていた例会にも、常時20数名の人が集まるようになった。しかしお互いが顔を合わせるのは、支部総会や新年晩餐会と、年2回の例会登山の時以外はない。

コミュニケーションの場と機会は、多いとはいえないのである。このことから会員相互の或いは、他支部との連絡交流・懇親の媒体としての会報の発行が、話題にのぼっていた。

昨年の支部総会で提案し承認されたが、発行期日は翌年3月末ということで、のんびり構えていた。また、誰かがやるだろうと鷹揚なことであった。期限が迫って来て、それではと、時間をタప్పリ持っているリタイア組の私が、原稿集めを買って出た次第である。

しかし年が明けて、1月いっぱい掻集めようとした原稿は、タイムリミットを過ぎても集まらず、周章狼狽することになった。

「内容が豊富に盛り込まれるには、暫く時間を要するでしょう」と奥野支部長が言っておられる通り、今回の不出来は原稿提出に協力を惜しんだ、会員各位の責任であるということにしたい。何しろ私も、年は取ってはいなくても、このような印刷物を作るなどは始めての経験である。幸い、本部や各支部から会報など多くの印刷物を頂いているので、いろいろと参考にさせていただいた。内容については、それらに比べ可成りの落差があるのは致し方がない。しかしながら見渡せば、我が支部も人材豊富のようであるから、次回からはもっとマシな支部報が出来るものと、期待している次第である。

（本田 記）



白水ダムから江代山をみる